

## 徒然草における「道」の一考察——儒釈道との関連をめぐって——

曹 景 恵

### はじめに

「道」という語は徒然草において頻出するが、実に多様な意味合いを担って使われている。それらの用例を一つずつ検討して言う「道」の語例が最も多く、一段、二十二段、五十一段、五十七段、七十三段、七十九段、八十段、百十段、百二十二段、百三十三段、百四十五段、百五十段、百六十七段、百六十八段、百八十五段、百八十七段、百八十八段、百九十三段、二百十九段、二百三十二段、二百三十八段などの諸段に見出される。他方、神仏、聖賢の教え、または仏道を意味する例は四十九段、五十八段、七十五段、九十二段、九十八段、百七十四段、二百四十一段などの諸段に見出される。兼好が「道」の第一義を仏道に留めていることは言うまでもないが、富倉徳次郎氏が「この道という言葉も勿論仏道を意味しているのであるが、しかし兼好にとって、『仏道』そのものが、多分に哲学的色合いの濃い仏道で、老荘思想とも相通じ、更に当時禅学が宋学と結びついて輸入せられていたことも

考えられて、そこに、兼好のいう『道』という語のニュアンスが考えられなくてはならない」と述べられているのは示唆的である（注一）。今成元昭氏は、徒然草二百四十一段の「直ちに万事を放下して道にむかふ時、さはりなく、所作なくて、心身ながくしづかなり」という一文を例として、中世の作品であれば、この「道」が仏道であることは常識的なことであるが、徒然草にあつてはそのような一般性は通用しないと説かれている（注二）。また、田村憲治氏は、徒然草の「まことの道」は本来仏道として使われていた言葉に、兼好は老荘思想における「至道」「真道」という意味合いを込めて使っていると論じ、徒然草に説かれる「道」を考へる際には、仏道だけでは捉え切れぬ場合が多く、それに老荘・儒家など様々な要素が混融したものと見る事ができるという見解を示されている（注三）。

以上の先行研究を踏まえつつ、本稿では従来「仏道」を指していると思われる、「道」に関する幾つかの章段を取り上げて、儒家思想、道家思想及び仏教思想の三方面との関連の視座から徒然

草における「道」の様相をあらためて考察し、その内実を明らかにしたい。

一

「なぐさめ草」に「此段、弓いる事にたとへて、万人の心のゆるまる事をいましめたる義也（後略）」と述べるように、九十二段は弓術の師の教訓に基づいて人間の心の裡に潜む懈怠の心への自省を述べる章段である。二本の矢を持つて的に向かった弟子に対して、「後の矢を頼みて、初めの矢になをさりの心あり。毎度たゞ得失なく、此一箭に定まるべしと思へ」と教訓する師匠の言に兼好は共感を覚え、「此戒、万事にわたるべし」と、それを万事に通ずる普遍的な実践の戒めとして受け止める。弓道の技術そのものを語るのではなく、弓道という狭い一分野を超えた、人間の生き方の根本にかかわるものとして兼好は弓の師の発言を捉えているのである。そして、章段の後半部においては「道を学する人」の懈怠の心に説き及んで、「何ぞ、たゞ今の一念にをひてすることとはなはだかたき、直ちに用ゐること甚かたき」と、自己の人間の弱さ・脆さまでも吐露している。ここには、徒然草の本源的なモチーフである「たゞ今の一念」の意義が提示されているが、これは百八段に見られる「されば、道人は遠く日月を惜しむべからず。たゞ今の一念空しく過ぐることを惜しむべし」という思考と軌を一にするものである。

本段の主題は懈怠の自戒にあるが、「道を学する人」の「道」については、これを学問・芸術などを含む広範の諸道と取る説と（注四）、仏道だけを指すとする説（注五）とがある。前引した百八段の記事との思想的脈絡が認められる事実と、諸注釈書が指摘する「正法眼蔵随聞記」の記事との類似性を考慮するならば、本段の「道」が仏道を意味する可能性は高いと思われる。「諸注集成」は「正法眼蔵随聞記」卷三の十三「夜話に云はく、古人云はく、「朝に道を聞かば、夕に死すとも、可なり」。今、学道の人この心あるべきなり」、同・卷五の八「学道の人、ただ、明日を期する事なかれ、今日・今時ばかり、仏に随ひて行じゆくべきなり」などの記事との思想上の吻合に注意し、『論語』里仁篇の「朝聞道、夕死可矣」という章句が『正法眼蔵随聞記』に引用されることにも注意を促している（注六）。また、安良岡康作氏は九十二段に述べる「道を学する人」は「学道人」を和訳した語だとされ、本段との間に類縁が認められる「正法眼蔵随聞記」の記事をも数条列挙する。「正法眼蔵随聞記」は道元禪師の垂示を、高弟である懷辨が忠実に記録したものである。「学道の人」の心得として寸陰愛惜と仏道修行の即行を道元が懷辨に説示した文言がしばしば見出され、徒然草九十二段後半部の思考とよく一致している。安良岡氏は、「道を学する人」の立場を自己の立場とし、寸陰の愛惜を自己の修行の問題として反省し自戒するところに徒然草と『正法眼蔵随聞記』との相違が存することに留意しつつも、

その原理を抽出するならば、芸能習得の条件・方法・態度などには仏道精進の過程とも相通するものがあり、その習得の過程において人間性の秘奥が示現するところに兼好の芸能に対する関心・興味の原点が求められると述べられている（注七）。九十二段に窺われる道念保持の工夫は諸縁放下による一道集中と、寸陰愛惜に立つ一念の精進とに要約できると思われるが、それは芸能や技芸を習得する上での本質的な課題でもある。弓道の一局面から「万事」に説き及び、最終的に「道を学する人」へと論を展開する兼好の真意は、仏道精進における懈怠の心を戒めることにあるのであろう。九十二段における兼好は弓道の師範の至言に人間性の機微を覲じ、そこに諸道における普遍的原理として、仏道の修行にも通ずる本質的なものを見出しているのである。

## 二

四十九段は徒然草全篇の中で最初に仏道精進の覚悟を直示する章段として注目される。前半では人生の短さを指摘し、無常の自覚とそれに根ざしての発心を勧めている。後半部には天台浄土教系の書物である『往生拾因』の文言を引用し、心戒上人の逸話などの具体例を以て万事を捨てて仏道修行の道につくべきことを力説する。冒頭の「老来て、始て道を行ぜんと待つことなかれ。古き墳は多くはこれ少年の人なり」という一文について、『寿命院抄』がその出典として「寒山頌」を掲げるものの、現存する文献

には同一の文言を見出すことができない。『野槌』は明の李卓吾編『浄土決』にある「古人句曰。莫待老来方学道、古墳盡是少年人」という文言を引くが、これは兼好より時代が下るものである。一方で、四十九段の冒頭二句とはほぼ同一の言が、梵舜本『沙石集』巻五本の十一「学生の歌好みたる事」及び「滯元直指集」に「古人曰」という形で見出されることが、近代の徒然草研究において指摘されている（注八）。梵舜本『沙石集』巻五本の十一「学生の歌好みたる事」には、恵心僧都の語や縁忍上人の歌を引いて仏道修行を怠るなど説いた後、「サレバ、若クサカリニツヨク、病ナカラム時ツトメラ、コナフベシ。老ヲ待つ事ナカレ。古人云、「老来リテ、初メテ道ヲ学セント云事ナカレ。古墳ヲホクハ是少年ノ人ナリ」ト。老少不定ノ国ナレバ、若シトテモ、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>マ<sub>レ</sub>。衆苦充滿ノ境ナレバ、富リトモ安穩ナルベシト思事ナカレ。フルキ墓をトブラ（ヘ）バ、オホクハ、ワカクシテ世ヲハヤウセル人ナリト云ヘリ」と述べている。同じ箇所が米沢本『沙石集』巻五本の十四「和歌の徳の甚深なる事」では、「されば、若く盛りにして強く、病なからん時、勤め行ふべし。老を待つ事勿れ。」「古墳多くはこれ少年の人なり」と。老少不定の国なれば、若しとて頼むべからず。古き墳を訪へば、多くは若くして、世を早くせる人なりといへり」となっているが、「古人云」の句を欠き、「老来リテ、初メテ道ヲ学セント云事ナカレ」という語句が略されているものの、梵舜本の内容とはほぼ一致している。いずれにしても、『沙

『石集』では「古人云」とするだけで、その典拠を明示していない。『全注版』では「兼好はあるいは、『沙石集』のこの個所によつて書いたかもしれない」としつつ、『帰元直指集』の「行脚求師開示序」に「古人云、莫待老来方学道、孤墳盡是少年人」という一文が見出されることを指摘し、無住や兼好は同書に「接すること」も可能であつたと説いている。一方、福田秀一氏は、梵舜本『沙石集』に「古人云」として記された二句は、徒然草の記事と若干字句に相違は見られるものの、出所は同じと見て誤りないであろうと述べ、「兼好・無住の一方もしくは両方が、出典など意識せず、一種の諺として引用しているのではあるまいか」と説かれている。

『帰元直指集』の作者円照宗本は宋の元符二年（一〇九九年）に没し、時代的には無住や兼好に先行する人物ではあるが、日本における『帰元直指集』の流布状況は不明であり、無住や兼好が同書に接した直接、間接の証拠は見出されず、文言の上では極めて近似しているものの、『帰元直指集』を徒然草や『沙石集』の出典として断定することはできない。他方、四十九段の「老来て、始て道を行ぜんと待つことなかれ。古き墳は多くはこれ少年の人なり」という冒頭の一文は明らかに漢籍か仏典等の章句を読み下したものと考えられるが、梵舜本『沙石集』の記事とともに語序としてやや不自然なところが見られることに留意したい。福田秀一氏のようにその不自然さは耳で記憶したところを文字に記した

ために発生したとする見方もありうるであろうが、徒然草と梵舜本『沙石集』が同様の読み下し方をすることは単なる偶然ではないと考えてよい。福田氏が言われるように、無住が「古人云」として引く文言は鎌倉時代には仏者の間で膾炙していて、兼好が一種の諺としてその文句を引用したという可能性も無視はできないであろう。しかしながら、徒然草と『沙石集』の両書が語序の上での不自然さまで共用すること、徒然草四十九段にはもう一箇所『沙石集』からの引用が認められ（注九）、両書は仏道勧進という主題において共通していること、また、兼好と無住とはともに同じ時代を生きて共通の地縁を有していたこと（注十）などの事柄を併せて考えてみると、やはり『沙石集』を媒体として「老来て、始て道を行ぜんと待つことなかれ云々」という文言を兼好が摂取した可能性は相当に高いのではないかと思量されるのである。

『沙石集』の前引記事との近似性、また仏道への精進を唱える全段の趣旨や「仏道を勤むる心もまめやかならざらん」という一文から考えれば、四十九段冒頭の「老来て、始て道を行ぜんと待つことなかれ」という記述でいう「道」とは、「仏道」を意味することが自明であろう。

### 三

五十八段は遁世を勧める章段であるが、仏道修行の食衣住行の生活面を問題にして、現実的な論を展開している。一段の主題は、

出家・遁世して山林に住む生活がどんなに修行のために重要であるかを主張するところにあり、持論の根拠として、兼好は「心は縁に引かれて移る物なれば、閑かならでは、道は行じがたし」と述べている。「閑かならでは、道は行じがたし」で言う「道」が仏道を意味することは、「道に入て世を厭はむ人」という文言や、同段結尾の「世を通れんことこそあらまほしけれ（中略）菩提に赴かざるは、よろづ畜類には変る所あるまじくや」という叙述によつて明らかである。

「閑かならでは、道は行じがたし」について、『新大系』は『摩訶止観』四下にある「閑居静処」の条を引いている。『摩訶止観』四下の「閑居静処」は「二十五方便」の最初に置かれた「具五縁」に属している行法であるが、「第三閑居静処者。雖具衣食住処云何。若随自意触処可安。三種三昧必須好処。好処有三。一深山遠谷、二頭陀抖擻、三蘭若迦藍。若深山遠谷途路艱險。永絶人蹤誰相惱乱。恣意禪觀念在道。毀譽不起是处最勝。（中略）若離三处餘則不可。（中略）市辺閑寺復非所宜。身入道必須選択。慎勿率爾」となっている。「身を安んじ道に入るには、必ずすべからく選択すべき」「好処」として、「止観」では「一には深山遠谷、二には頭陀抖擻、三には蘭若迦藍なり」の三例を挙げているが、「深山遠谷」とは徒然草五十八段に述べる、世を捨てて「山林に入る」遁世生活の環境によく近似し、「閑居静処」の条は五十八段の論旨ともよく一致していると思われる。小稿（注十一）で考察を行

ったように、『摩訶止観』は中世の知識人に親しい書物であつて、徒然草七十五段にも書名を明記しての引用を為しているところから考えて、兼好が『摩訶止観』に対して積極的な関心を抱いていたことが容易に想像される。文言を直接に引用しての論説ではないものの、五十八段において『摩訶止観』の記事の受容が認められてよいかと推量されるのである。

#### 四

『壽命院抄』が「前段、余論也。靜ニシテ性ヲ守事ヲ肝要トスル義也」と述べるように、七十五段の主眼は「つれづれ」という心身の安樂境を求めることにある。生活の閑寂境・心身の安樂境を志向する点において五十八段と思想的脈絡を有しているが、末尾に『摩訶止観』の文言を例証としつつ、「いまだまことの道を知らずとも、縁を離れて、身を閑かにし、事に与らずして、心を安くせむこそ、しばらく楽しむとも言ひつべけれ」と述べている。七十五段と『摩訶止観』との関連については前掲した小稿で詳述したところで、ここで再説することは差し控えたいが、四十九段において仏道精進を強烈に唱えた兼好が「まことの道」、つまり仏道が悟得できなくても世俗の縁務を離れて心身の閑寂を保つならば、それこそ「しばらく楽しむ」境地であるとするところにあらためて留意されたい。それについて田村善治氏は「仏道修行という点からすれば中途半端なやや不徹底な物言いであるのだが、

老荘の「道」を考えるとよく理解できる」と述べ、本来仏道の意として使われていた「まことの道」という言葉に、「兼好は老荘思想における『至道』という意味合いを込めて使っている」と論じられている（注十二）。『至道』は『莊子』在宥篇の「吾語女至道。至道之精、窈窕冥冥。至道之極、昏昏默默。（後略）」という記事に由来する言葉で、最上の根源的な真理、究極根源の實在すなわち無為自然の道そのものを意味する言葉であり、いわば道家思想の軸心である『道』そのものである。『莊子』田子方篇の「夫得是至美至樂也。得至美而遊乎至樂、謂之至人」という一節が示すように、この無為自然の道を己れの境地として身につければ至上の善美と愉樂が実現でき、その至上の善美を吾がものとして至上の愉樂すなわち無為自然の道を己れの境地とする生活に悠々自適する人こそが至人であるという。筆者は兼好が目指す「しづか」なる境地を考える際に、老荘思想に説かれる「虚静」「無為」との関連が留意されていかと考察を行ったが、七十五段の末尾に「縁を離れて、身を閑かにし、事に与らずして、心を安くせむ」ことを「樂しむ」と述べるように、心身の閑静と人生の安樂とを関連付けて論ずる兼好の思考と『莊子』天道篇に見られる「言以虚静推於天地、通於万物。此之謂天樂」という一文との類似に注目し、「虚静」と「天樂」とを関連して論ずるところに、徒然草七十五段との親近性が見出されることを指摘した（注十三）。『莊子』にいう「天樂」とは「天」、すなわち超越的な真理である「道」

と調和して一体になった境地で、絶対世界の愉樂のことを指している」と理解されるが、天道篇の当該の文言と同趣の思想は至楽篇の「今俗之所為、与其所樂、吾又未知樂之果樂邪。果不樂邪。吾觀夫俗之所樂、拳拳趣者、經綏然如將不得已、而皆曰樂者、吾未不樂也。亦未之不樂也。果有樂、無有哉。吾以無為誠樂矣。又俗之所大苦也。故曰、至樂無樂、至譽無譽」という文言にも見出される。至楽篇は無上の快樂、すなわち人生の至福がいかなるもので、いかにして得られるかについて論ずる一章であるが、「吾以無為誠樂矣」のように、見出した解答は「無為」、すなわち前述した「虚静恬淡」たる境地そのものにあると述べている。「虚静恬淡寂寞無為」といった「静」なる境地への安住や無為自然の道を志向する境地を「誠樂」と説く『老子』『莊子』の思想と、徒然草に見られる閑寂の境地への勸説との親近性を念頭に置きつつ、『莊子』に述べる「至道」「至美至樂」という言説と七十五段の当該の文言とを併せて再考慮するならば、『至美至樂』という最高の楽しみの境地である「まことの道」は兼好のいまだ至り得ない、超越したものであり、兼好は何者にも束縛されない閑暇の中に生を生きる在り方を、「しばらく樂しむ」と賞揚したのである」という田村憲治氏の発言はよく的を射た見解であるように思われる。七十五段は諸縁放下の提唱の裏付けとして『摩訶止観』の文言を引用し、仏教思想との脈絡を有することは確かであるが、本来仏道を意味する「まことの道」という言葉（注十四）を用いつ



つも、「いまだまことの道を知らずとも、縁を離れて、身を閑かにし、事に与らずして、心を安くせむこそ、しばらく楽しむとも言ひつべけれ」のように、「莊子」の「無為誠楽」という思想を受容し書き記すところに、徒然草における道仏融和の側面が示されていると理解されるのである。

## 五

百七十四段は鷹犬を例に出して人が仏道に精進すべきことを説いた説示的な章段である。「文段抄」が「此段は。世の人大道の氣味深きをしらぬゆへに無益の事をなせり。万事を捨て道を味ひたのしむべしとの心也」と評する如く、一段の主眼は「人事多かる中に、道を楽しむより氣味深きはなし。是まことの大事なり」という一文にあるが、兼好の道念を明示するものとして重要視すべき記事であろう。「道を楽しむ」という詞について、「句解」は「愚案するに、道とは仏道をさす」と述べるが、「参考抄」は「此道の字儒釈道の三教にわたるべし」と注する。近代の注釈書は儒・仏いずれの道を指すかということでは必ずしも意見が一致せず、多分仏道を頭に浮べて記したものであるとする説（注十五、道を仏道とのみ限る必要はない、神儒仏にわたる説（注十六）、仏の道とする説（注十七））に分かれている。「全注釈」は七十五段の「いまだまことの道を知らずとも、縁を離れて、身を閑かにし、事に与らずして、心を安くせむこそ、しばらく楽しむとも言ひつ

べけれ」という考え方との関連から、「道一般ではなくて、仏道（仏の教えに随って、悟りに至る道への精進に喜びを持つ意となる」と説き、「評釈」はそれに従うべきであろうとする。「氣味深きはなし」については、早く「なぐさめ草」に「白氏文集」卷三十三「老来生計」の「人間榮耀因縁浅。林下幽閑氣味深」という詩句との関連が指摘されているが、当該の詩句は『和漢朗詠集』巻下雜・閑居にも見出される。稲田利徳氏は「万丈記」の「魚ハ水ニアカズ。イヲニアラザレバ、ソノ心ヲシラズ。トリハ林ヲネガフ。鳥ニアラザレバ、其ノ心ヲシラズ。閑居ノ氣味モ又ヲナジ」という一文とも重なるところがあると述べつつ、前引の漢詩（「白氏文集」の詩句）などを念頭に置いて記したかもしれないとする（注十八）。

先述した如く、近代の注の多くは諸縁放下の上での「道を楽しむ」ことを「まことの大事」とし、本段は仏道に志すことへの勧めを唱えるものであると理解している。しかしながら、「道を楽しむ」という言い回しは仏道修行の意としては少なからぬ違和感を覚える表現である。前引した「全注釈」の見解や、「全訳注」の「仏道によって心が満たされる」「仏道の中で心身が安らぐ」という釈文はいずれも理に合った説明ではあるが、本論では、兼好が熟読した「論語」に唱える「楽之」「楽道」という思想との関連の視座からの再考を試みたい。

「論語」雍也に「子曰、知之者、不如好知者。好之者、不如樂

之者」という有名な章句が存する。『論語集解』が「苞氏曰。學問知之者。不如好之者篤。好之者。又不如樂之者深也」と注するように、孔子は學問に向かい合う姿勢を「知る」「好む」「楽しむ」という三段階に分けてそれぞれの態度の深淺を比べ述べている。「知る」とはそのもの、あるいはその事柄の存在を知ること、「好む」とは自らの向かい合う対象に対して特別な感情を抱くことで、「楽しむ」とは自他融和して一体になった状態である。「楽しむ」ことがもつとも賞揚される態度とされていることは、当該の章句により明らかである。『論語義疏』では「好之者、不如樂之者」について、「樂謂觀樂之也。好有盛衰、故不如性歆而樂之。如顏淵樂在其中也。故李充曰、好有盛衰、不如樂之者深也」と注し、顏回を「樂之者」の例として挙げている。『義疏』の当該注文に照応するものとして、『論語』雍也に「子曰、賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回不改其樂。賢哉回也」という章句が見出される。粗末な食事に甘んじ、住宅は狭い露地という貧しい生活にもかかわらず、「其樂」を貫き通している顏回に対して孔子は賢人だと賞賛する。当該の章句について『集解』では「孔安國曰。顏淵樂道。雖箪食在陋巷。不改其所樂也」と注し、また『義疏』では「所樂則謂道也」「美其樂道情篤、故缺始末言賢也」と疏しているが、孔子が言う「其樂」とは「道を楽しむ」ことであることは明らかである。

「楽しむ」という境地を提唱する発言としては他に、『論語』学

而に「子貢曰、貧而無諂、富而無驕何如。子曰、可也。未若貧而樂、富而好礼者也（後略）」という章句が見出される。「貧しくして諂うことなく、富んで驕ることなき」ことの徳を認めつつも、孔子は「貧くして楽しみ、富んで礼を好む」というさらに上の段階を唱えるのである。「未若貧而樂」について『義疏』では「孔子更說貧行有勝於無諂者也、貧而無諂乃是為可、然而不及於自樂也。故孫綽云。顏氏之子、一簞一瓢、人不堪憂、回也不改其樂也」と疏しているが、顏回の「安貧樂道」の精神が再び引用され言及されている。また、「貧而樂」という当該の一節が岩崎文庫藏論語集解正和四年本をはじめ、日本に現存する論語の古抄本のほとんどにおいて「貧而樂道」とされていることも留意される（注十九）。章句になかった「道」という語を自ら補うのは、当該の章句に対する『集解』の「鄭玄曰。樂謂志於道不以貧賤為憂苦之也」「孔安國曰。能貧而樂道。富而好礼者。能自切磋琢磨者也」という注文の影響を受けての作為と考えられてよいであろうが、ここまで検討してきた如く、「好之者、不如樂之者」「回也不改其樂」「貧而樂道」に見られるような「楽しむ」という境地、つまり自他融和して一体になる状態は儒家思想において最も賞揚される至高の境地であり、その至高の境界に達することを得た代表的人物が顏回なのである。『義疏』の疏文に即して言う、顏回は「道を楽しむ」境地の実践者であり「樂之者」なのである。

顏回と言えば、徒然草百二十九段、二百一十一段に登場する人物



で、百三十段や百六十七段にも『論語』から顔回の語を引用する文言が見出される(注二十)。「顔回は、心ざし、人に勞を施さじとなり」(百二十九段)、「徳ありとて、頼むべからず。顔回も不幸なりき」(二百十一段)のように、その名を明記した上で『論語義疏』の注文を踏まえて引用する態度(注二十一)からは、顔回その人に対する兼好の関心の高さと『論語』に対する理解の深さが窺われる。徒然草全段中に顔回の「安貧樂道」に対する直接の言及は見られないものの、『論語集解』『論語義疏』などの古注釈を媒体にして『論語』を熟読したと思われる兼好(注二十二)は、前述した「樂之」という境地を重視する孔子の思想(注二十三)や、『義疏』に説く如く「道を樂しむ」顔回その人の生き方をも十二分に把握していたはずである。儒家思想に説く「樂しむ」という自他融和の概念を踏まえて、百七十四段の「人事多かる中に、道を樂しむより氣味深きはなし。是、まことの大事なり」という一文を再吟味するならば、仏道修行を勧める言説としての違和感は緩和され、兼好の真意がより明瞭に理解されるように思われる。「道を樂しむより氣味深きはなし」という発言は、『論語』に説かれる「樂之」や『論語集解』『論語義疏』に述べる「樂道」という概念を基盤として、前引した白楽天の詩句を加えて構成されたものと考えられるのであって、儒家思想において最上の境地とされる「樂之」という態度を以て仏道に臨むことを勧める兼好の道念を、そこに読み取り得るのである。

## 終わりに

以上検討してきた如く、兼好の仏道に対する精神的希求・仏道精進への意欲を示す態度は無常の自覚に促されてのものである。『往生捨因』『摩訶止観』などの仏教関連書籍から文言を引用し、自説を立証している。しかしながら、その一方で、兼好が仏教のいかなる教理に感激し、いかなる宗教的境地を以て心の安らぎを得たかに関しては、まったく示されていない。「世俗」から「悟得」を目指す段階へ、さらにそこから衆生の「消度」に生きる段階へ、という向上的、発展的過程こそ仏道を第一義とする宗教的精進の本筋であるが、徒然草に見る限り、兼好の宗教観はかかる真の仏教的、求道の立場に徹しているとはいえない。世俗の諸縁を放下して直ちに仏道に入るべしというのは兼好の持論であるが、二百四十一段の末尾に「直に万事を放下して道に向かふ時、障りなく、所作なくて、心身永く閑也」と記す如く、諸縁を放下して仏道の精進によって開けてくる境地を「障りなく、所作なくて、心身永く閑也」と定義する。換言するならば、心身の閑静境を仏道に向かう最終的目標として捉えているのである。兼好の求道心の不徹底は、「心合ひて覚えしことども」として九十八段に『一言芳談』の記事を引く際に、「仏道を願ふといふは、別のことなし、暇ある身に成りて、世の事を心にかけぬを第一の道とす」と、原文にある「道をさきとして」を省き、「餘事」を「世の事」に改めて記すところからもよく窺われる。兼好は「仏道をさき」にする

いう肝要な部分を欠落させたままで、「暇ある身に成りて、世の事を心にかけぬ」ことを第一とする。つまり、世間の雑務から解放され閑暇ある身となり、心に世間の俗事を思わぬようにすることこそが、仏道修行の第一になすべき務めだと述べているのである。百七十四段の「人事多かる中に、道を楽しむより気味深きはなし。是、まことの大事なり。一度道を聞きて是に心ざ、む人、いづれのわざか廃れざらむ、何事をか當まん」という一文には、兼好のかかる道念が如実に具現されていると考えられる。「道を楽しむ」ことを「まことの大事」と明言する兼好の道念は、仏道に寄り添いつつも仏道そのものに収斂されるのではなく、前述した顔回の「楽道」の精神を支えるところに自らの道心を定位するのである。七十五段について考察したように、「縁を離れて身を閑かにし、事に与らずして、心を安くせむ」という心身の安静境に兼好は隠遁の至境、生を楽しむ最高の生き方を見出しているが、その根底には『莊子』の「無為誠楽」という思想の受容があったと考えられる。「まことの道」を悟ることは異なる地点で生の充実を見つけようとする兼好の態度は、百七十四段の「人事多かる中に、道を楽しむより気味深きはなし。是、まことの大事なり」という一文にも示されているが、ここでは儒家の「楽之」という思想が拠り所とされている。このような道念の在り方は互いに相容れないのではなく、それらがむしろ混じり合ったところに兼好は自ら生の根拠を置き、理想境を見出していると考えられる。

(注一) 富倉徳次郎『徒然草：類纂評釈』（開文社 一九五六年）。  
(注二) 今成元昭『徒然草の源泉―仏典―』（『徒然草講座』第四巻 昭和四十九年十一月 有精堂）。

(注三) 田村憲治「まことの道―儒・仏・老荘―」（『国文学 解釈と教材の研究』第三十四巻三号 学燈社 平成元年三月号）。

(注四) 内海弘蔵『徒然草評釈』（大正十一年改訂版 明治書院 明治四十四年初版。塚本哲三『徒然草解釈』（昭和三年訂正版 有朋堂。山岸徳平・三倉栄一共著『徒然草評解』（昭和三十年版 有精堂。佐野保太郎『徒然草講義』（昭和二十八年版 福村書店）白石大二『徒然草』（評釈国文学大系 昭和三十年初版 河出書房）などがある。『徒然草解釈大成』。桑原博史『徒然草の鑑賞と批評』（明治書院 昭和五十二年九月）。

(注五) 橋純一『徒然草新講』（昭和二十七年決定版 武蔵野書院）『徒然草解釈大成』『徒然草全注釈』『徒然草全訳注』『徒然草』（日本の古典）『評釈』など。

(注六) 『正法眼蔵隨聞記』巻二の十四「外典に云はく、朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。」（『方丈記・徒然草・正法眼蔵隨聞記・歎異抄』日本古典文学全集 小学館 昭和四十六年）。

(注七) 安良岡康作「兼好における芸能観の問題」（『国語と国文学』昭和二十六年二月）。

(注八) 福田秀一「徒然草第四十九段の冒頭」（『中世文学論考』明治書院 昭和五十年）。以下の福田説は同書に拠る。安良岡康作『徒然草全注釈』。

(注九) 四十九段の「速やかにすべきことを緩くし、緩くすべき事を急ぎて、過ぎにし事の悔しきなり」という一文とかなり類似する表現

が『沙石集』巻六の七「説經師強盜に値ふ事」に見出される。当該説話には、「百年の命、朝露に緩からず。須く道の急を存すべし。緩くすべき所を急にすべし。急にすべき所を緩くす。豈、一生自ら誤まれるに非ざらん耶」という嘉祥大師の言を引き、仏道の実践の重要性を語る文章が存するが、その文意と言辞は、仏道の修行を勧める徒然草四十九段の趣旨及び「速やかにすべきことを緩くし、緩くすべき事を急ぎて云々」という一文とよく似通っている。

(注十) 拙稿「無住與兼好」(『台大日本語文研究』第十一期、二〇〇六年六月) 参照。

(注十一) 拙稿「徒然草における閑寂の境地―仏教思想及び道家思想との関わりを中心に―」(『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』第十八号、二〇〇四年十一月) 参照。

(注十二) 注三に同じ。

(注十三) 注十一に同じ。

(注十四) 「化城喻品 赤染衛門 こしらへてかりのやどりにやすめずはまことのみちをいかでしらまし」(『後拾遺和歌集』(『新日本古典文学大系 岩波書店 一九九四年』) 雑六・釈教・一一九二)「上東門院あまにならせたまひけるころ、よみてきこえける 選子内親王 きみすらもまことのみにいりぬなりひとりやながきやみにまどはん」(同・雑三・一〇二六) など、和歌にその用例は少なからず見出される。(注十五) 吉川秀雄(『新訳 徒然草精解』(精文館 昭和二十四年版) 佐野保太郎「徒然草講義」(福村書店 昭和二十八年版) 松尾聡「徒然草全釈」(清水書院 昭和三十一年改訂版) (『徒然草解釈大成』)。(注十六) 塚本哲三「徒然草解釈」(有朋堂 昭和三年訂正版) (『徒然草解釈大成』)。

(注十七) 橋本一「徒然草新譚」(武威野書院 昭和二十七年) 齊藤清衛「徒然草の新しい解釈」(至文堂 昭和三十一年改訂版) 佐伯梅友「徒然草新釈」(金子書房 昭和二十九年) 山岸徳平・三谷栄一共著「徒然草評解」(有精堂 昭和三十年) 富倉徳次郎「徒然草・類纂評釈」(開文社 昭和三十一年) 西尾実「方丈記・徒然草」(日本古典文学大系 岩波書店 昭和三十一年) (『徒然草解釈大成』)。

(注十八) 稲田利徳「徒然草」(古典名著リーディング4 貴重本刊行会 平成十三年。初版は「徒然草」日本の文学古典編 株式会社はるぶ出版 昭和六十一年)。

(注十九) 筆者が確認した限りでは正和四年本のほかに、蓬左文庫蔵論語集解(元応二年本) (『元應鈔論語集解攷文』杉浦豊治 経学研究會 一九五八年、東洋岩崎文庫蔵論語集解(南北朝写・宗重本)、京都大学付属図書館清家文庫蔵論語集解の諸本は「貧而楽道」となっている。

(注二十) 「善に誇らず」。

(注二十一) 拙稿「徒然草における『論語』の受容」(『中世文学』第四十八号、平成十五年六月) 参照。

(注二十二) 注二十一に同じ。

(注二十三) 吉田賢抗氏は「論語で、好学・好礼や、不亦楽乎・不改其業・梁山・樂水・知其樂のように、孔子は常に楽しみ、常に深く好み愛するものがあつた。この積極性が孔子の特徴である」とする(『論語』新釈漢文大系、第三十二頁)。

\* 「徒然草」の本文は、正徹本を底本とした「方丈記 徒然草」(『新日本古典文学大系 岩波書店 平成元年』)に拠った。米沢本「沙石集」

は市立米沢図書館蔵本を底本とした『沙石集』（新編日本古典文学全集 二〇〇一年 小学館）、梵舜本『沙石集』はお茶の水図書館蔵成寶堂文庫梵舜本を底本とした『沙石集』（日本古典文学大系 一九六六年 岩波書店）に拠った。『摩訶止観』は『大正新修大蔵經』第四十六卷諸宗部三（大正新修大蔵經刊行會 昭和二年）に拠った。『論語』『老子』『莊子』などの漢籍の引用は『新釈漢文大系』（明治書院 昭和四十三年）に拠った。『論語集解』は管原本と称される卷子古抄本を底本とした『論語集解』（影印有造館縮臨古本刊本 文求堂書店 昭和十一年）、『論語義疏』は大正十二年懷德堂刊本（『武内義雄全集』第一巻論語篇所収）に拠った。『方丈記』の引用は『方丈記 徒然草』（新日本古典文学大系 岩波書店 平成元年）に拠った。なお、引用文中に付した傍線及び『論語集解』『論語義疏』引用文中の句説点は筆者が私に付したものである。

\*本論文で主に参照し引用した徒然草の注釈書は以下の通りである。  
 桑宗巴『徒然草寿命院抄』の引用は吉澤貞人『徒然草古注釈集成』（勉誠社 平成八年）に拠る。林道春『徒然草筆槌』（吉澤貞人『徒然草古注釈集成』勉誠社 平成八年）。松永貞徳『なぐさめ草』（吉澤貞人『徒然草古注釈集成』勉誠社 平成八年）。加藤磐斎『徒然草抄』（長明方丈抄 徒然草抄）加藤磐斎古注釈集成三 有吉保編 新興社 昭和六十年。北村季吟『徒然草文段抄』（北村季吟古注釈集成 新興社 昭和五十四年）。南部草寿『徒然草辭解』（同志社大学図書館蔵本。浅香山井『徒然草諸抄大成』（同志社大学図書館蔵、貞享五年五月刊の板本）。田辺鶴『徒然草諸注集成』右文書院 昭和三十七年。三谷栄一・峯村文人共編『徒然草解釈大成』（岩波書店 昭和四十一年）。

安良岡康作『徒然草全注釈上下』日本古典評釈全注釈叢書（角川書店 昭和四十六年）。三木紀人『徒然草全訳注（一）』（四）講談社学術文庫 昭和五十四年・昭和五十七年。稲田利徳『徒然草』（古典名著リ・ディング4 貴重本刊行會 平成十三年（初版は『徒然草』日本の文学古典編 株式会社ほるぷ出版 昭和六十一年）。久保田淳『徒然草評釈』『国文学解釈と教材の研究』（学燈社 昭和五十三年五月・平成二十一年七月）。なお、研究者の氏名を以て以上の各注釈書を示すこともある。

（そう けいけい 台湾大学日本語文学系助理教授）

#### 研究室受贈圖書雑誌目録Ⅳ

語学と文学（群馬大学語文学会）四五

国語学研究（東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行會）

四八

国語教育論叢（島根大学教育学部国文学会）十八

国語国文学（福井大学言語文化学会）四八

国語國文學報（愛知教育大学国語国文学研究室）六七

国語国文学誌（広島女学院大学日本文学会）三八

国語国文学研究（熊本大学文学部国語国文学会）四四

国語國文研究（北海道大学国語国文学会）一三五、一三六

国語國文論集（安田女子大学日本文学会）三九

國語と教育（長崎大学国語国文学会）三三、三四